

河北新報収蔵 戦中の白黒写真



渡辺教授（右端）にカラー化の技術を教わる学生たち

歴史の1枚 カラー化始動

河北新報が収蔵する戦時中の白黒写真をカラー化するプロジェクトで、宮城学院女子大（仙台市青葉区）の学生による彩色作業がスタートした。戦災の記憶を次世代に伝承しつつ、リアリティを増した写真の力で風化にあらがひ、不戦の誓いを新たにしている。

戦後
80年

カラー化を数多く手がけてきた東京大学大学院の渡辺英徳教授（情報デザイン）が21日、宮城学院女子大を訪問し技術指導。プロジェクトに参加する学生のうち13人が出席し、白黒写真の画像データを自前のノートパソコンに取り込んで彩色に挑戦した。

学生たちは人工知能（AI）を用いて自動彩色するアプリを使い、白黒写真をカラー化。AI任せのままであれば明らかに不自然な色になることや彩色漏れすることがあるため、別の画像編集ソフトを使って修整・塗り直しの技術も学んだ。

石巻市の女性竹やり部隊の写真（1943年）を担当する日本文学科2年の阿久津春菜さん（19）は「福島市」は「白黒」と『歴史の中の1枚』という感覚だが、カラーになると途端に現実味が増す。過去のことを調べながら作業を頑張る、戦争の記憶を風化させないようにしたい」と話した。

渡辺教授は「基本的な技術は伝えられた。映り込んでいるもの一つ一つに思い入れを持って、時代背景を調べたり、誰かの意見を聞いたりして取り組んでほしい」と述べた。

プロジェクトは昨年10月にスタート。仙台空襲を捉えた1枚を先行してカラー化し、今年1月8日の河北新報朝刊とオンラインに掲載した。学生たちは今後、分担して白黒写真9枚に彩色。戦災経験者や歴史研究者による色彩監修を経て2月末ごろに渡辺教授が出来栄を確認し、完成した写真から順次、紙面とオンラインで公開する。

宮城学院女子大生 AI 活用、指導受け作業